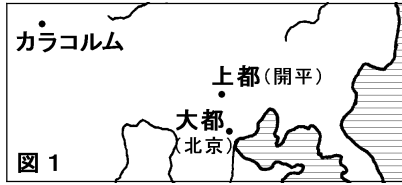


東南アジア諸国・東アジア諸国に出兵したモンゴル帝国

東方の勢力の支持を受けて相続争いに勝利し、1260年に即位した第5代の【1: 】位1260-94は、1264年、自らの勢力の強い東方に支配の中心を移し、1264年に中都に遷都、国号を【2: 】1271-1368と称した。中都は金の首都だった時代の呼称で、1267年に造営開始、1272年に【3: 】と改称した※1。今日の北京である。1279年に南宋を滅ぼしたフビライは、中国全土を支配した。以下に周縁諸国に対する出兵や支配の状況をまとめる。



※1 元の首都を問われた場合、厳密には初期は中都なのだが、大都でも許容範囲と思われる。金の首都が中都であったことも希に問われる。なお、1256年、フビライは上都を建設（当時は開平府、即位後の1264年に上都と改称）、夏の都とした。冬の都は大都（北京）である。少なくともフビライが現役皇帝の間、彼の宮廷は文武百官・貴族をうち連れて、夏と冬で移動を繰り返していたと推定される。まるで遊牧民である。…いや、ホントに遊牧民なんだから。上都・大都間は約280kmだが気候は大きく異なる。図1

チベット

受験的にはチベットは大元ウルスの属国のひとつであったと記憶してよい。

- 1) モンゴル帝国のチベット支配は、1240年、オゴタイの息子コデンのチベット攻略に始まる。この時、カダム派の寺院を焼き、僧侶を殺した。後にコデンはチベット仏教6代目座主のサキヤ・パンディタにラサヤサキヤ派が統治していたウー・ツァン地域に対する政治権限を与え、サキヤ派とモンゴルとの同盟が形成された。サキヤ派はモンゴル帝国の後ろ立てを得て、他の氏族教団や諸侯の上に君臨した。
- 2) フビライは即位すると、フビライのもとにいた【4: 】(サキヤ・パンディタの甥)を帝師に任命(1260年)し、元における仏教に関する全権を任せた。1264年にはパспаのために最高統制院が作られた。また、パспаにチベットの中心部に対する政治的、宗教的権威を委ねた。パспаはフビライに請われてモンゴル語を記述するためのパспа文字を作り、それは1269年公布された。以上のように、大元ウルスにとって、チベットは単なる属国ではなかった。なお、パспа文字はしだいに廃れ、ウイグル文字でモンゴル語を表記するようになる。

朝鮮

- 1) 高麗 918-1392は、北から遼(契丹、キタイ) 916-1125、金 1115-1234の侵入を受けたが持ちこたえた。
 - 2) 1231~1273年、モンゴルの侵攻を受け、40年以上も激しく抵抗したが降伏。約80年間服属し元寇にも参加させられた。大元ウルスから鎌倉幕府への使者も実は高麗の高官だった。事実上の国軍である三別抄は講和に反対し、1270~73年、江華島、濟州島、珍島などを拠点に抵抗した。これを【5: 】10R, 15Jと言う。三別抄は日本に支援を求めたが黙殺された。鎮圧の翌年(1274)が第一次の元寇(文永の役)であり、【5】は大元ウルスの日本侵攻を遅らせたと言われる。
- 参考 井上靖の歴史小説『風濤』(ふうとう)は二度にわたる元寇を元の側から、特に高麗を舞台として描いている。

日本

- 1) フビライの命令で、大元ウルス及びその属国である高麗王国によって2回にわたり対日本侵攻が実行された。日本は鎌倉幕府統治下。日本側の呼称は元寇。蒙古襲来とも言う。2回とも激しい抵抗と暴風雨のために失敗したとされ、「神国」思想が強調される契機となった。なお、わが国最初の武士政権は鎌倉幕府ではなく、平氏政権(六波羅政権 1167ないしは1179~1185)であるとするのが最新の有力学説である。
 - ①文永の役 1274年(文永11年) 大元ウルス・高麗軍 3万余
博多湾を埋め尽くした大元ウルス・高麗軍が一夜にして消失させたのは、暴風雨のためではなく海を越えての不慣れな遠征、武将間の対立などで夜の間に撤収したとする説が有力である。また、兵力も小さく、実質上、「威力偵察」だったとする見方もある。この間にフビライは南宋を滅ぼした(1279年)。
 - ②弘安の役 1281年(弘安4年) 大元ウルス・高麗・旧南宋軍(多数の傭兵) 14万
鄭和の南海遠征以前としては、世界史上最大規模の艦隊であったとされる。旧南宋軍の大半は傭兵であり、南宋の敗北で失業した彼らが強盗団化しないよう、日本に送り込んで「処理」したという見方もある。博多湾に沈む輸送船からは農具が発見されており、土地を奪取することができたら耕作する準備までしていたという説もある。
大元ウルス・高麗・旧南宋軍からなる侵攻軍は対馬、壱岐の武士団を全滅させ、10月20日、博多湾に上陸した。九州北部での激しい攻防戦の結果、彼らは敗れ撤退にかかった。当時の艦船では、博多・高麗間の北上渡海は南風の晴れた昼でなければ危険であり、この季節では天気待ちで1か月かかることもあった。このような条件の下、侵攻軍は夜間の撤退を強行し海上で暴風雨に遭遇したため、多くの軍船が崖に接触して沈没し、多くの被害を出しながらも11月27日に帰還。
- 2) その後の日中関係は、2度も侵攻したので、さすがに国家間の正式の国交は開かれなかったが、民間の海上貿易は活発に行われ博多は栄えた。絹、陶磁器、大量の銅銭が輸入された。禅僧も往来した。

雲南・ヴェトナム・ビルマ・ジャワに対する大元ウルスの侵攻については既にNo.27とNo.28で既習だが以下に摘要

大理: フビライは1254年、雲南の大理を滅ぼした。支配者はチベットの白蛮だが、配下のタイ人の先祖がこれを機に南下、タイとラオスの原型が形成された。タイ人の南下は大理の滅亡以前から徐々に進んでいた。

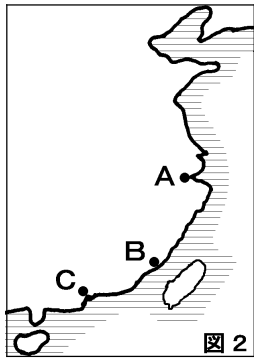
ベトナム: 1257年から【6: 】大越国は侵攻を3度撃退した。デルタの農民も奮戦した。

チャンパー: フビライの侵攻を2度も撃退した。

ビルマ: 【7: 】1044-1287はビルマ人が11世紀に建国した最初の統一王朝である。パガン朝は大元ウルスに対する朝貢を拒否。大元ウルスはフビライの命で1277~87年、パガン朝に侵攻し、制圧した。パガン朝は雲南方面から南下したタイ系のシャン人(後にアヴァ朝を建国)からも攻撃され、1287年滅亡した。大元ウルスは傀儡政権を建て服属させた。

ジャワ島: 【8: 】1222-92は大元ウルスに対する朝貢を拒否。侵攻を受ける前にシンガサリ王国は内紛で倒れたが、ジャワの人々は大きな犠牲を出しながらも反撃し、撃退した。この反撃の中から、新しい指導者が建てた国がマ

ジャバヒト王国である。



【まとめ】

- 1) ビルマでは傀儡政権を建て服属させたが、大元ウルスが軍事遠征によって長期にわたり服属させることができたのは高麗だけであった。東南アジア諸国は、大元ウルスの侵攻を、大変な犠牲を出して撃退した。多くの場合、大元ウルスの侵攻目的は達成できなかったが、ジャバ島ではマジャパヒト王国が成立し、日本では鎌倉幕府滅亡の原因の一つとなるなど、この時期の政治変動の一因となった。
- 2) 当然、撤兵直後の関係は最悪となるが、大元ウルスの対外政策が平和路線に転換した13世紀末には、ほとんどの国は大元ウルスと通商関係を確立した。活発な海上交易で、図2の港市が繁栄した。

A : 【9: 】 ハンチョウ こうしゅう

B : 【10: 】 チュワンチョウ せんしゅう

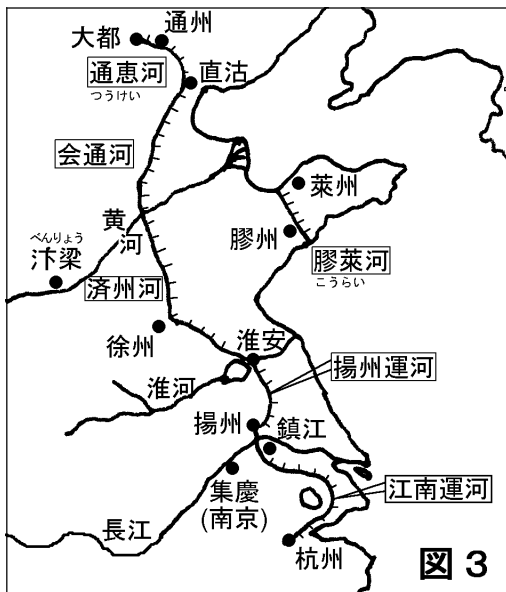
C : 【11: 】 コワンチョウ こうしゅう

元の中国支配

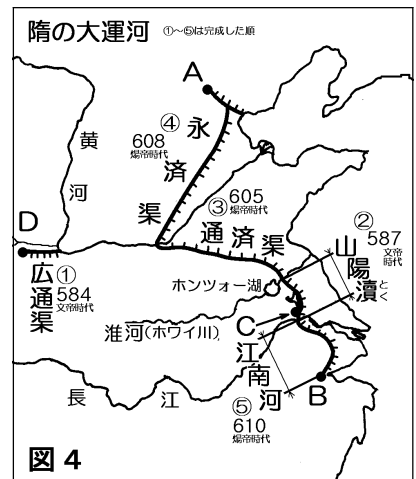
- 1) 中国を統治した大元ウルスは、宗教にも異文化にもきわめて寛大だった。統治の邪魔にならない限り無用の規制を加えることはしなかった。統治と徴税以外には無関心だったとも言える。キリスト教、イスラーム教、道教、仏教などが公然と布教された。民間では道教と仏教が信仰された。道教は全真教と正一教（天師道）に分かれて発展した。皇帝とモンゴル貴族層はチベット仏教に帰依した。これへの過度の寄進が財政破綻の一因となった。財政破綻を招くほど厚く保護されたとも言える。パスパ（パクパ）が作った【12: 】は元朝の官文書の書体となった。しかし、パスパ文字はしだいにすたれ、ウイグル文字でモンゴル語を表記するようになる。
- 2) 元は儒学を蔑視し、【13: 】を廃止した。公用語はモンゴル語。ただし、科挙は14世紀初頭に小規模ながら復活し、曲阜の孔子廟を再建するなど、儒教保護の政策も実施した。フビライに仕えた許衡 1209-1281 は宋学の官学化を推進した。
- 3) 従来からよく教科書に出てくる多数説では、元は厳しい民族序列支配を行ったとされる。この支配方法自体には歴史的名称はないが、そのポリシーはモンゴル人第一主義と呼ばれてきた。旧多数説に従い「エライ順」にあげると、
 - ① モンゴル人 主要官職（中央の高官、地方長官）を独占 科挙は廃止（後に復活）
 - ② 【14: 】 西アジア系諸民族 モンゴル人を実務で補佐 財務官僚など
様々な民族の人々という意味。瞳が黒以外の人という意味ではないから注意しよう。
 - ③ 【15: 】 金人、高麗人、金治下の漢民族
「漢人」をこのような意味で使うのはこの時代だけである。一般には漢民族の意味。
 - ④ 【16: 】 旧南宋地域の漢民族 科挙廃止で士大夫層は官僚機構からしめだされる。
少数のモンゴル人による支配を維持するため、以上のような民族序列支配を行ったとされてきたが、このような事実はなかった（元を倒した明朝の正当性を強調するために創作された）という説が近年有力になっている。
- 4) 大元ウルスは、中国を支配する際、中央政府の中書省と同格の行中書省 こうちゅうしょしょうを各地において地方を統治した。これは、それまでの地方統治と比べ、はるかに広い範囲を管轄するもので、行省 こうしょうともいう。現在の中国における地方行政の最高単位である省は、行省に由来している。
- 5) 大元ウルスは徴税には強い関心を示し、徴税請負人を使って厳しく徴税した。しかし、農業自体や農耕社会には無関心であったため、宋以来の、大土地所有と佃戸制は認められ、地主制は更に拡大した。

陸上、海上の交通路を支配したモンゴル帝国

内陸都市であるにもかかわらず、大都には港があった。大都はモンゴル帝国の陸・海の広域交通網のターミナルであり、大都を中心としてユーラシア大陸を円環状に結びつける世界初の一大交通網が成立した。



- 1) 海上交易は図2の3つの港市を中心に繁栄した。
- 2) 【17: 】が改修され南北を強く結びつけた。図3は元代の運河網である。図4は隋代の大運河である（No.43）。隋代は汴梁付近で黄河と合流、汴梁を頂点とするL字型になっていたが、元代には直線に近づき、また、山東半島の付け根を南北に縦断する運河も掘られた。



- 3) 交通路の安全を重視し、その整備や治安確保に努めた。陸路では【18: 】（ジャムチ）を整備した。チンギス=ハンが創設、太宗が制度化、元代に完成。大都を中心とする主要道路10里ごとに站たんを設け、民戸100戸を站戸たんとし、責任者をおいて、旅行者に馬・食料を提供させた。この站たんが「駅」に相当する。大元ウルスに限らずモンゴル帝国で広域に実施されたから東西交流に果たした役割は大きい。

牌符はいふ（牌子はいず）とは、官用で旅行する者が携行した一種の通行証で、金牌、銀牌、銅牌、鉄牌、木牌などがあり、ウイグル文字、パスパ文字等で記載され、駅伝制の利用に必要なだった。現代中国語で「站」は鉄道などの駅の意味。

- 4) 【19: 】の隊商はヨーロッパにいたる陸路交易を行っていた。